

第2回 キミコエ・オーディション 課題演技

課題は伊藤篇、田中篇の2つです。

課題①、②それぞれの人物設定・状況設定を読み込んだうえで、お手持ちの録音機器、又は録画機器で台詞を収録してください。

収録したデータは、キミコエ・オーディションホームページの「応募について」に従いWEB又は郵送にて提出してください。

※台詞は、

「課題1・伊藤篇 台詞①」→②↓課題2・田中篇 台詞①」→②」の順番で収録してください。

課題1 伊藤篇

【人物設定】

伊藤・歌人でありながら新聞の校正記者として糊口ここうをしのぐ二十三歳の青年。食い扶持ぶちに困り生活費を捻出する手段として探偵稼業を始める。

知的ではあるが、粹にはまらない奔放な自由人。常日頃は自信家のように振舞うが、繊細な内面を持つ。

【状況設定①】

頻発する怪盗事件について、由々しき事態だと思いつつも興味をそそられ、いくらか楽しんでるような様子で。親しい友人を相手に飄々ひょうひょうと。

【台詞①】

「ほらこの新聞記事を読んでごらんなさいよ。なんでも先せんだって美術館に押し入ったくだんの賊ぞくが今度は竹田財閥家の屋敷たけだざいばつけに忍び込んで、またもや盗みを働いたらしいのです。次はここで警察も目をつけている中でのことですからなかなか…。これはどうしたのですかねえ。田中さん。」

【状況設定②】

とある殺人事件の犯人を突き止め真相を語らせようと。真剣な表情で。感情を込めて。

【台詞②】

「わかっています。あなたは彼が憎くて殺したわけではない。否、むしろ愛していたからこそ手にかけるしかなかった。そうなのでしよう？ その心情を理解するのはやぶさかではありません。しかし、僕

には一つだけわからないことがあるのです。」

課題2 田中篇

【人物設定】

田中・國學院大學で教鞭をとる若き国語学者。二十六歳。
理論的な常識のある人物。心根は優しく物腰穏やかな一方、生真面目で情熱的な部分もある。たびたび伊藤に振り回されているが、内心ではその才能に惚れこんでいる。

【状況設定①】

持病に伏せていた友人のもとを訪ねて。気遣いながら。

【台詞①】

「やあ。体の具合はどうだい。おや、今日は顔色がよいね。よかった。

今日はさ、君と花見でも洒落込しやれもうと思つて寄つてみたんだ。おっと急に障さわりがあるなんて言い出すのはなしだよ。一日暗い部屋に閉じこもつていちやあ良くなるものも良くならない。」

【状況設定②】

探偵稼業に味をしめた伊藤に、二件目の事件への協力を請こわれ意見する。伊藤の才能を認めていればこそその、真面目な忠告。

【台詞②】

「絶対に嫌だからね、伊藤くん。僕は断固として断る。いいかい、君はね、あの怪事件をみごとに解決して名声めいせうを上げたから、それはそれで良いかもしれない。けれども僕は君の短歌が好きなんだよ。探偵たんていを歌人伊藤かじんの名刺代わりにするやり方は僕の趣味ではない。」